

## 『戴曼公唇舌図訣』の思想について

西巻 明彦

北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部／日本歯科大学新潟生命歯学部医の博物館

本史料である『戴曼公唇舌図訣』は、北里研究所東洋医学総合研究所で保管している緒形文書の一部である。『戴曼公唇舌図訣』は、同じ緒形文書の中にある『唇舌帖』と対をなすもので、『唇舌帖』が図譜編であるならば、『戴曼公唇舌図訣』は、図譜に対する説明編である。緒形文書は、緒形春朔(1748～1810)の5代目である緒形駒雄から国立伝染病研究所に明治44年(1911)に寄贈されている。緒形春朔は、自からが著したという『種痘必順弁』の中で、寛政2年に上秋月村大庄屋天野甚左衛門の二児に鼻幹苗法による人痘法を行ったことで有名である。この緒形文書は、ドイツ万国衛生博覧会に出品されたという記録がある。この記録により、『戴曼公唇舌図訣』、『唇舌帖』とも、ドイツで公開供覧された可能性がある。展示後、再び国立伝染病研究所にもどったが戦災で消失されたと言われていた。平成2年(1990)以降、添川正夫氏の指示により北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部で保管されている。

『戴曼公唇舌図訣』、『唇舌帖』は、緒形春朔の孫である緒形文友が、京の痘科医佐井聞庵に入門した際、筆写したものである。『戴曼公唇舌図訣』、『唇舌帖』とも、十八唇之図訣、八舌之図、陽舌十三之図、陰舌十三之図、五死舌之訣があり、痘診に対応している。『唇舌帖』は、さらに太極図が加えられている。緒形文書の中にある『唇舌帖』は、タテ23.7cm、ヨコ16.5cm、12ページ(本文)ゆうする。1ページごとに3図ずつ唇舌帖が描かれており、厚紙を重ねて中間に和紙をはさみ、唇、舌を一図ごとに切り取り、和紙にはりつけている。さらに白い絵具を重ね的に積み重ねて、POXや舌苔を立体的に作成、着色している。このため、立体的に非常に美しい唇舌図として、仕上がっているのが特徴的である。

『戴曼公唇舌図訣』、『唇舌帖』とも佐井聞庵由来の筆写本で、池田端仙由来のものである。池田端仙は、周防国玖珂郡通津村の出身で、戴曼公に痘科を伝受されたという池田嵩山は曾祖父にあたる。このことから考えるならば、本史料である『戴曼公唇舌図訣』は、内容的に戴曼公由来の図訣と推測される。戴曼公は、杭州の出身で明滅亡後日本に帰化し、痘科に優れた治術をもっていたとされている。そのため、この舌診図訣も清代ではなく、明代の舌診の概念で書かれているのではないかと思われる。『池田先生痘瘡治術傳』によれば、「痘中十二日ハ診セス。亦腹候モセス是池田の大秘受也。診脈セサルハ特ニタラス。亦腹候セヌハ虚弱ノ小兒腹ヲ按スレハ多ク下利ヲナス。却テ害アリ。故池田家ニテハ始終唇舌ヲ以テ寒熱虚実ヲ弁知ス。」と述べられ、少なくとも池田家の痘瘡治術においては唇舌診が、脈診、腹診よりも重要な診断法として挙げられていることが特徴的である。

舌診書のまとまった専門書は、元代の敖氏による『金鏡録』で、これは散逸しているが、杜本が元末に『敖氏傷寒金鏡録』が出版され、これをもとに、明代の薛己が『薛氏医案十六種本』、『薛氏医案二十四種本』に『敖氏傷寒金鏡録』を収載している。しかし、『敖氏傷寒金鏡録』は、杜本の原本と、薛己本との間には、内容に差があると考えられている。その他、申斗垣の『傷寒観舌心法』、これを修訂した張登の『傷寒舌鑑』が有名である。これらは、『傷寒雜病論』を基底として立論されており、今回『戴曼公唇舌図訣』と『傷寒雜病論』の関係、痘瘡における舌診の概念について、考察を行った。